



中須・大田原小学校百年史より

当時、菅野ダムの建設中の時代の子供たちの
(時代の風景) の散文を掲載させていただきました。

文、吉永幸視氏

しかし、校庭を見回してみるのに、あのギーコギコいうブランコ、あのにごった池、そして、あの大木だけは、私の頭の中にある情景と同じであり、あの止まりかける時計、あのげた箱、そして、あの校舎だけは、私たちの幼い日を知っているんだ、と、安心するのである。やっぱり、私たちの母校なんだ、と、思うのである。

小学校の思い出

昭和四十六年卒業生 吉 長 幸 視

ぼくが中須小学校に入学したのは、昭和四十年でした。当時は、菅野ダムを建設中で、ぼくたちといっしょにその関係の子どもたちが入学してきました。それで全部で四十九人だったわけです。学級も一組と、二組に分けられました。ぼくは二組でした。

入学したばかりのころは、心はいつもうきうきでした。あの学用品やなんかの新しいにおいはよく覚えています。その日の授業は、まず「せーんせいおはよー……」という歌でいつもはじまりました。みんな大声をだしてうたい、とても気持ちよかったです。

一組と二組は、よく対立しました。「こんど講堂のうらで決闘やろうか。」なんて話が出たこともありましたが、それもぼくたちの学校生活のひとつの楽しみでした。

二年生になると、急に友だちの数が減っていきました。ダム工事の仕事がなくなったので、その子どもたちが転校していったわけです。みんな宮崎とか、遠くへ帰るのです。それで、組も一つにされました。

もう、一組とか、二組とかいえないと思うと寂しかったです。

二年になると、少し勉強というものを意識しました。というのは、「九九の計算」を競争で覚えなければならなかったのです。毎日、担任の松原先生のところへ行っては、テストをしてもらったものです。

ぼくは、水がきらいでした。三年生になると、ほとんどの人が内山先生の指導で、バタ足で泳ぐことができるようになりました。でも、ぼくはこわくてだめでした。夏休みも、プールへ行くことは、ほとんどありませんでした。「食わず嫌い」というやつです。自分だけ泳げないなんてくやしけれど、どうもやれなかったのです。

四年生になって、初めて男の先生に習いました。広林先生です。とてもきびしくて、毎日宿題がドッサリありました。それから教え方もきびしかったです。ぼくは、こんな経験があります。漢字のテストをおしでした。なおして持って行っても、間違っていたら「だめ。」ただそれだけ。また考えてなおしていても「だめ。」どこがわるいか言ってくださらないのです。そうして五、六回目ごろにやっと

「こうなっちょろうが。」と教わりました。その字は「業」でした。ほんとうにつらかったです。また、理科のテストなおしでは、ついにいちばん最後まで残されて、わからないものだから、実験までやらされたことがあります。その時は涙がでそうでした。

水泳も、広林先生に、ぼくは泣きながら無理やりに顔を水につけられて、できるようになりました。あの時は、先生を恨んだけど、あとになってよかったと思いました。

五年生になると、夏休みはソフトボールの練習がありました。ぼくは、それがとっても嫌いでした。へただったからです。それに、自由に遊べなくなったからです。あの汗とグロブの油がいっしょになった臭いの悪い印象はまだ捨てきれません。六年でも同じでした。体育のときは、消極的なほうでした。

この時、ぼくは児童会長をやりました。そして毎月一回代議委員会をひらきました。このことで、ぼくは人を指導することのむずかしさを知りました。「もうやりたくない」などと思ったこともありましたが、小学校六年間をふりかえって、ぼくは、小学校が自分を鍛えてくださったことに感謝します。例えば、小さいころ弱虫だったぼくでも、なんとか弱虫でだけはなくなりました。公共の道徳も知りました。人の指導のむずかしさも知りました。なんでも、やればできることもわかりました。ぼくは、これらのことを今後さらに生活に役立てていきたいと思えます。ぼく以外の人たちもそう思っていると思えます。今後の中須小学校のご発展をお祈りします。

思 い 出

昭和四十七年卒業生

三 木 智 信

ぼくは、まだ卒業して二年にも満たないので、小学校生活六年間の事で、今でも覚えている事という、実にたくさんあります。たとえば、学校へ行き始めて、初めて雨のふった日、新しく買ってもらった傘をさして行きました。ところが、帰る時になって傘たてにあまり傘がさしてあるので、自分の傘がわからなくなってしまう泣きだしてしまった事や、土曜日の帰り道、一せい下校で、みんなならんで帰る時、女の先生が前を速く歩いてくれないので、その場でわる口を言って怒られたりして、ぼくは中須小学校の一生徒になったのです。

ぼくは、体育は好きでしたが、得意ではありませんでした。夏休みになると、中須、須金、須々万、長穂

の地区の男子が、それぞれの学校に集まって、ソフトボールの練習をし、大会をひらくのですが、ぼくは六年になって、ようやくBチームのレギュラーにしてもらえました。それも試合の日、最初はセカンドを守っていたのですが、一度ファーストに暴投をし、すぐにライトにまわされました。

ぼくは、絵が得意でした。二年のころ、わるさばかりしていたぼくを、なんとかおとなしくさせようと、美術クラブに入れてもらったほど絵が好きでした。一度県展に入選したこともありました。

ぼくは、一年と二年のときの担任の藤井先生の指導で、そろばんもやってみました。はじめのうちは簡単なのでおもしろかったのですが、だんだんむずかしくなると、二ヶ月一回ある試験も落ちっぱなしでした。続けて根気強くやらないと、母によく叱られました。

これが、ぼくの思い出の『一部分』です。ほかにも遠足だとか、運動会、五人の担任の先生のことだとか、みんな楽しい思い出ばかりです。

小 学 校 の 思 い 出

昭和四十八年卒業生

有 田 信 浩

小学校の思い出と言えば、やっぱりソフトボールのことだろう。せまいグラウンドながらよくやった。

夏になると、本格的シーズンの開幕。夏休みの北部四校対抗ソフトボール大会の「優勝」に向かって、練習、練習。この練習、きびしいというより、ぼくにとってはむしろ楽しかった。夏休みの練習日に、たまたま雨が降ると、その雨を一日中うらんだものだった。

ぼくは守備よりもバッティング、つまり打撃の方が好きだった。というのは、守備はキャッチャーだった